

聖書の死後の世界(死、陰府等)

▶聖書における「死」

<1>旧約時代の「死」

□死者の肉体と魂は分離し、①肉体は墓に葬られ(→**第一の死**)、

②**すべての人(義人、罪人)の魂**は「陰府」(ハデス：ギリシア語、シオール：ヘブライ語)に行く。

→息子や娘たちが皆やって来て、慰めようとしたが、ヤコブは慰められることを拒んだ。「ああ、わたしもあの子のところへ、嘆きながら陰府へ下って行こう。」(創世記 37 : 35ab)

→わたしの魂は苦難を味わい尽くし/命は陰府にのぞんでいます。(詩編 88 : 4)

→命ある人間で、死を見ないものがあるでしょうか。陰府の手から魂を救い出せるものが/ひとりでもあるでしょうか。(詩編 89 : 49)

→陰府は、「広く」(ハバクク書 2 : 5)、「深い」。(ヨブ記 11 : 8)

→そこで、「(イエス・キリストは)高い所(→天国)に昇る(→昇天の)とき、捕らわれ人(→信者たち)を連れて行き、人々に賜物を分け与えられた」と言われています。(エフェソの信徒への手紙 4 : 8)

□陰府(広義)は二つの場所に分かれていた(金持ちとラザロ=ルカによる福音書 16 : 19~31)。

・**信者(義人)の魂**は、「アブラハムのすぐそば(アブラハムのふところ：口語訳)」(ルカによる福音書 16 : 22) = 神が用意される宴席(天国)に行く。

→やがて、この貧しい人は死んで、天使たちによって宴席にいる**アブラハムのすぐそば**(→**慰めの場所**=ルカによる福音書 16 : 25)に連れて行かれた。(ルカによる福音書 16 : 22a)

・**未信者(罪人)の魂**は「陰府(ハデス)」(狭義)に行く。

→あの者たちまで、こんな**苦しい場所**(→**もだえ苦しむ場所**=ルカによる福音書 16 : 25)に来ることのないように、よく言い聞かせてください(ルカによる福音書 16 : 28b)

→そればかりか、わたしたち(→アブラハムのすぐそば=慰めの場所)とお前たち(→ハデス(狭義)=苦しい場所=もだえ苦しむ場所)の間には**大きな淵**があって、ここからお前たちの方へ渡ろうとしてもできないし、そこからわたしたちの方に越えて来ることもしかない。(ルカによる福音書 16 : 26)

<2>新約時代の「死」

□死者の肉体は魂と分離し、①肉体は墓に葬られる(→**第一の死**) →旧約時代の「死」と同じ。

②死者の魂の行方は、信者の場合と未信者の場合とで異なる。

・**信者(義人)の魂**は、直ちに天(楽園=パラダイス)に引き上げられる。

→彼は楽園にまで引き上げられ、人が口にするのを許されない、言い表しえない言葉を耳にしたのです。(コリントの信徒への手紙二 12 : 4)

・**未信者(罪人)の魂**は、「ハデス」に行く。

□千年期(千年王国)後に起こる**未信者(罪人)の第二の復活**(黙示録 20 : 12)によって、未信者(→結合した体と魂)は、**白い玉座の裁き**の後、**火の池**(→ゲヘナ：ギリシア語)に投げ込まれる。(→**第二の死**)。

→海は、その中にいた死者を外に出した。死と陰府も、その中にいた死者を出し、彼らはそれぞれ自分の行いに応じて裁かれた。死も陰府も**火の池**に投げ込まれた。この火の池が**第二の死**である。

その名が命の書に記されていない者は、**火の池**に投げ込まれた(黙示録 20 : 13~15)。

→**ゲヘナ Gehenna**は、罪人の永遠の滅びの場所であり「地獄」を指している。

エルサレムの南端にある「ヒノムの谷」(→【参考】2 イエス時代のエルサレムを参照)を意味するヘブライ語のゲーヒンノーム Gei Hinnom を語源とするギリシア語ゲエンナ γέννα に由来する。

<3>新しい天と新しい地における死

→そこには、もはや若死にする者も/年老いて長寿を満たさない者もなくなる。百歳で死ぬ者は若者とされ/百歳に達しない者は呪われた者とされる(イザヤ書 65 : 20)。

▶**眠りにについている者**、起きよ。死者の中から立ち上がれ。(エフェソの信徒への手紙 5 : 14c)

→イザヤ 26 : 19、60 : 1

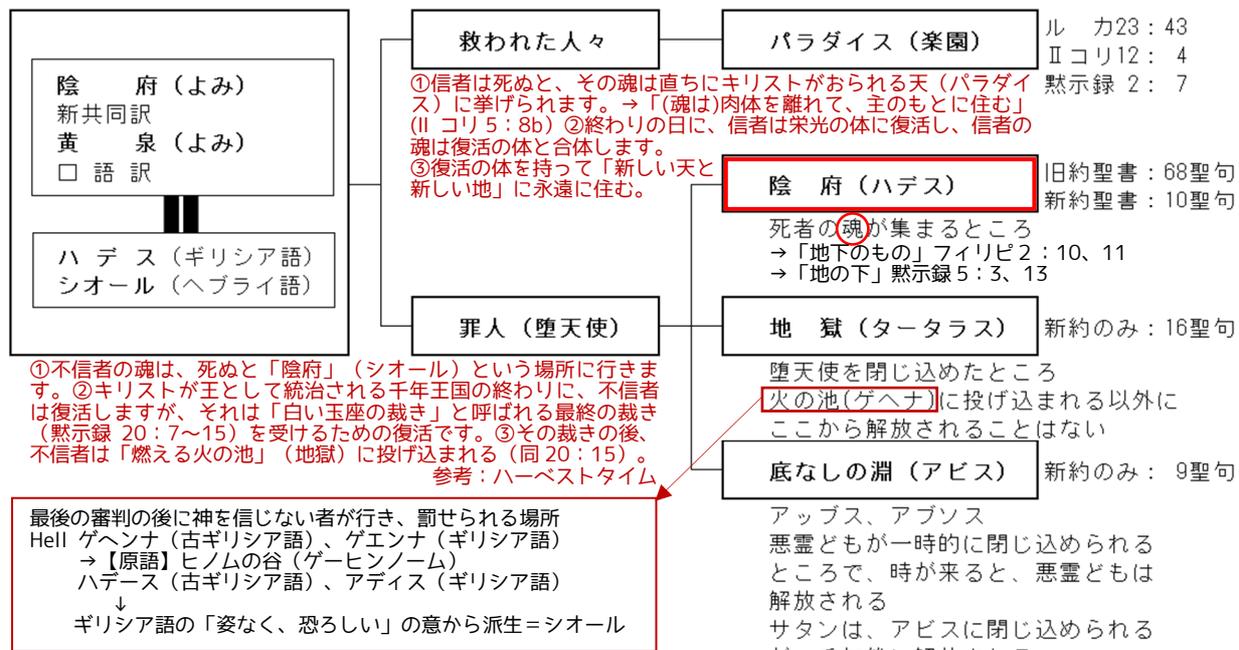
< 1 > 新約聖書中のギリシア語「ハデス」は、ギリシア神話の地下の死者の国の支配者、冥界の神クロノスとレアの子で、ポセイドンとゼウスの兄ハデス Hades から来ている言葉で死者（未信者）の魂が行く場所である。

< 2 > 旧約聖書中のヘブライ語「シオール」 (Sheol) を、日本語訳聖書では次のように訳している。

- ・口語訳聖書：黄泉（よみ）
- ・新共同訳聖書、聖書協会共同訳：陰府（よみ）
- ・新改訳聖書：よみ（旧約）、ハデス（新約）
- ・リビング・バイブル：地獄等

類語であるギリシア語の「ゲヘナ」は、罪人の永遠の滅びの場所であり、地獄をさす場所として用いられることが多く、訳し分けがなされている。

一般に、キリスト教内でも地獄に対する捉え方が教派・神学傾向などによって異なり、地獄と訳されることの多いゲヘナと、陰府、黄泉と訳されることの多いハデスの間には厳然とした区別があるとする見解、区別されるがそれほど大きな違いとは捉えない見解など、様々な捉え方がある。



ペトロの手紙 2 : 9

主は、信仰のあついで人を試練から救い出す一方、**正しくない者たちを罰し**、裁きの日まで閉じ込めておくべきだと考えておられます。

【参考】 悪の三位一体(サタン、獣、偽預言者)、死と陰府、そして罪人の行方 (NIV: NEW INTERNATIONAL VERSION / NKJV: NEW KING JAMES VERSION)

▶ **獣(反キリスト)・偽預言者**

↓ (黙示録 19 : 20) 硫黄の燃え盛る火の池(聖書協会共同訳)
硫黄の燃えている火の池 the fiery lake of burning sulfur(NIV)
the lake of fire burning with brimstone(NKJV)

▶ **悪魔=サタン=年を経た蛇=竜**

↓ (黙示録 20 : 2、3)
底なしの淵(アビス)
↓ 千年後に解放される (黙示録 20 : 7、10)
火と硫黄の池 the lake of burning sulfur(NIV)
the lake of fire and brimstone(NKJV)

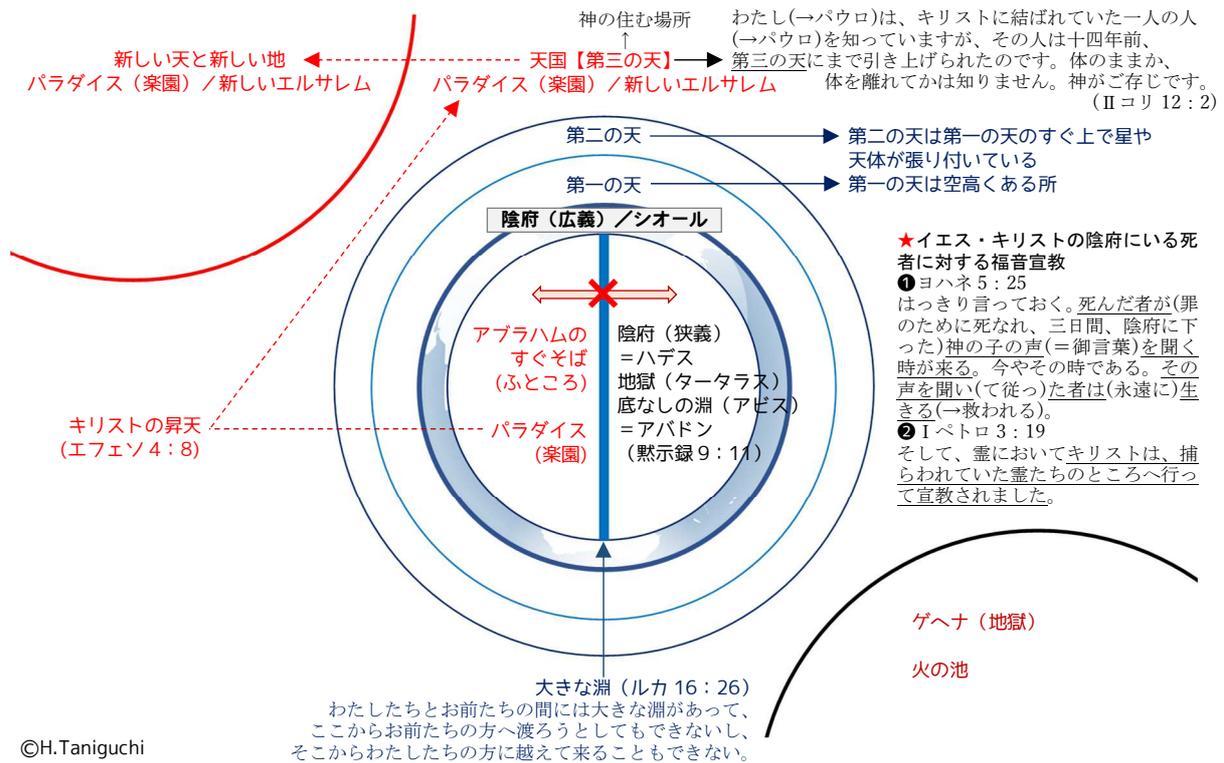
▶ **死・陰府**

↓ (白い玉座の裁き 黙示録 20 : 14)
火の池 the lake of fire(NIV/NKJV)

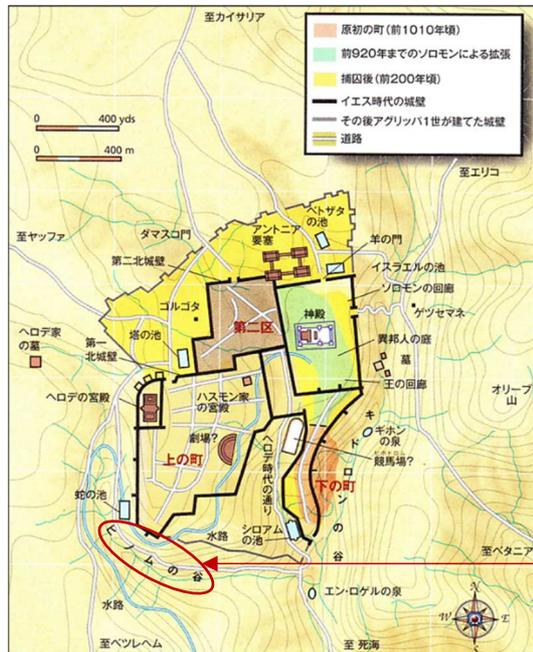
▶ **罪人(命の書に記されていない者)**

↓ (白い玉座の裁き 黙示録 20 : 15)
ハデス(陰府)
↓
火の池 the lake of fire(NIV/NKJV)

【参考】1 旧約時代の世界観(死、陰府等) イメージ図



【参考】2 イエス時代のエルサレム



【参考】3 天国(神の御国)

天国と呼ばれる「神の御国」は、「神が人と共に住む」世界です。その原型は、天地創造の時、「エデンの園」にあった。エデンの園で、神の御国は、地上世界と一体であったが、人間が墮落した時、神の御国と地上世界は切り離され、「天国」となって分離した。分離したばかりの「天国」は、「国」というより単なる「パラダイス」(コリント信徒への手紙 12:4)であり、「楽園」だったが、父なる神、御子なるイエス・キリスト、また多くの住民を擁する都市国家「天のエルサレム」(ヘブライ人への手紙 12:22)になった。神を信じ、キリストの教えに従う者は、死後、皆この「天のエルサレム」に入っている。「私たちキリスト者の本国(国籍)は天にあります」(フィリピの信徒への手紙 3:20)。キリスト者は死後、神のみもと「天国」に導かれ、滅びることなく、「永遠の生命」に生きるのです。こうして、キリスト者(クリスチャン)の魂は死後、「天国」に行き、未信者の魂は死後、「陰府」に行くのです。(参考文献:キリスト教入門 久保有政 著 P.162, 163 より)

古来ここで幼児犠牲が行われ、また後に町の汚物や動物・罪人の死体が焼却されたことから、死後悪人が罰せられる場所、すなわち(地獄)の同義語となった。
→ヨシュア記 15:8、18:16、列王記下 23:10、歴代誌下 28:3、33:6、ネヘミヤ記 11:30、エレミヤ書 7:31、32、19:2、6、32:35